日本人を知る

宗　教　的　二　重　性

2025年8月23日

西九州伝道所
佐々木正明

私たちは日本人です。ですから私たちは、日本人のことは良く知っている、と思っています。でも、日本人だから日本人のことを知っていると、思い込んでいるところもあります。

私たちが日本人に福音を語ろうとするとき、驚かされるのは、彼らの神観です。それが日本人自身にも、よくわからないままなのです。日本人には二つの異なった神観が、ぴったりとくっついて存在しています。それは二層の神観とでも言えるでしょう。ひとつは日本人の精神である神道の、きわめて高尚な部分で、目で見ることが出来ない神、手で触れることが出来ない神、言葉で表現することもできない神。人間を超越した神。神と呼ぶ事さえ憚られる神を敬う心です。

日本人の神観には、かならず、そのような層があり、日常の生活にも強く影響しています。このような神が、天という高い次元におわしまして、私たちの日常生活、私たちの生き方をご覧になっている。だから私たちは、しっかりした生き方をしなければならないという感覚に繋がります。

しかも、この気高い神では無い神は、西欧のキリスト教のような、隠れたことも見ておられる、怖ろしく怖い神では無く、あくまでも優しく、弱く罪深い人間に、寄り添ってくださる神なのです。

日本の神意識のもう一つの層、いわば、低い方の層は、八百万のの神々の世界です。世の中に存在するものすべてに、神々がくっついているのです。犬の神、蛇の神、川の神、山の神、海の神、月の神、太陽の神といった具合です。このような神観を、私たちはアニミズムと呼びます。

最近やたらに増えてきた神道的な感覚の宣伝ビデオなどは、殆どこれに属して、人間をはるかに超越した高尚な神の話は、ほとんど出てきません。これが神道の俗化した姿で、聖書の世界観と同じです。ただ、聖書ではそのようなものを神とは呼ばず、天使だとか、み使い。あるいは悪霊だとか汚れた霊と呼んでいます。ただ呼び方が違うだけで、内容はほとんど同じです。

日本でも、このような神々に願をかけて、病気が治っただとか、探し物が見つかったという話はよく聞きますが、聖書の世界も同じです。ただ聖書は、そのようなことはあくまでもまじないや口寄せの類で、神とは

関わり合いがないのです。（聖書には例外が一か所だけあって、そのような力ある悪霊や汚れた霊を、人間より力あるものと認めて、「神」と呼んでいるのです。） 日本の八百万の神々の世界は、聖書の背景の、アニミズムの世界と同じなので、目くじら立てて否定する必要はありません。ただそれは天地をお造りになった神様とは、まったく次元の違う、完全に別のものだと理解してください。

聖書では、創造者と創造物という厳密な区分け、いわば大根の味噌汁を作る人間と、大根が全く別なものだという以上に、明らかな区別があり、この二つは絶対に混同できないのです。ところが日本の神道的感覚では、そのような区分けはありません。ですから曖昧になってしまうのです。そして、八百万の神々の世界の、幼稚な神観に触れる機会の多い日本人は、つい、「神なんていない」と叫んでしまうのです。でも、その同じ日本人が、宗教を大切にし、宗教的感覚を尊んでいるのです。神なんていないと叫んでいても、真面目な宗教感覚を悪く言う人はいないのです。

それは神なんていないという日本人も、気高い神感覚、神では無い神の感覚を、捨てきることが出来ないで、持ち続けているからに他なりません。日本人はこの優しい自然の中に、神がいらっしゃるという感覚も持っています。ともすれば自然を神にしてしまうこともあるのです。

低い神観では、八百万の神々が全ての自然物に宿っているというような言い方をします。しかし、気高い神意識を表に出すときは、この気高いお方が万物に宿っておられると感じるのです。そのときの神観は、まるでこの世界には、ただ一人の神がいらっしゃるだけだという、一神教的感覚になるのです。

聖書から見るならば、これは不思議ではありません。天地をお造りになった神が、ずっと、自然物、つまり、被造物を通して、人間に語りかけておられるのですから、（ロマ1：18～） 人間は、自然物を通して語りかけられる神を誤解して、自然の中に様がいらっしゃると、考えてしまったのです。でもこれは完全な誤解ではありません。いつも語っているとう通り、聖書によれば、私たちの神は、すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのものの内に宿り、すべてのものをご自分の中に収めておられる神なのです。私たちも、神の内に生かして頂いているのです。

天地創造の神と言うものを想定できていない神道では、理解できない領域です。日本の神話の中には、アメノミナカヌシの尊と呼ばれる創造神が、たった一度だけ顔を出しますが、それっきりになっています。日本人はすでにあるものを、ありがたく頂戴する文化ですが、聖書では、すでにあるものが、どうしてあるようになったのかと追及しています。

さて、このような二重の、あるいは二層の感覚を持っている日本人に対し、私たちはどのように接触したらよいのでしょう。

① まず敵対しない。論争をしないことです。日本人の二重の神感

覚、2 層に重なっている神概念のどちらを持ち出されても、「そうですね。実は、私たちが大切にしている聖書にも、そのようなことが書かれているのですよ」と、相槌を打つのがいいでしょう。
② 喧嘩しないで、仲良く相槌を打ちながら、次はゆっくりと、聖書の教えをお伝えするのです。そして、日本人の神感覚の不完全な所、欠けているところ、曖昧な所を、聖書の教えで埋めていくのです。

八百万の神々に夢中になっている方には、「なるほど、そうですか」 聖書の世界と基本的に同じですね。といいながら、・・・・・偶像礼拝などという厳しい言葉は控えて・・・・・ただ、聖書の世界と違うところは、聖書には、万物の造り主である、神様がいらっしゃると、記されていることですと、丁寧にまた優しく説明してあげるのです。日本人にも、そのような感覚が、まったくないわけではないですよね。くらいまでは突っ込んでもいいかもしれません。そこから、気高い天の存在に、話が進めばそれもよしです。
神道の気高い神意識を持っておられる方には、その意識のすばらしさを称え、その意識の元が、天地を造られた神だと、聖書は教えていることを、説明できると素晴らしいですね。

日本人は、あるいは日本人の精神の発露である神道では、神では無い神を感じる感覚を、かなり強く持ています。ところが、その人間世界を超絶したお方を恐れ敬うあまり、そのお方について考えることを止めてしまったのです。それはある意味で、とても素晴らしいことだと思います。自分たちが最も尊敬し尊んでおられる方を、根掘り葉掘り調べるなどというのは、失礼と言うより、不敬ですね。
実際、西欧のキリスト教は、不敬のそしりを免れないでしょう。「みだりに神の名を唱えてはならないと、聖書は教えているのです。

でも一方、聖書はその方のことを、このように教えています。というより、その尊いお方は人間を愛し、人間と交わりを持つために、人間に近づき、自己紹介をさえして下さっているのですよと、人間を愛しておられる神を強調できたら素晴らしいですね。日本人の神は、ただ見守っていてくださる神にされていますが、聖書の神は、人間を助けようとしておられる神です。

私たちは、日々の生活の中でいよいよ神に信頼し、もっともっと神の恵み、導き助けを経験し、感謝と賛美を重ねて行きましょう。それと同時に、この神についてまだ何も知らない日本人に、積極的に語りかけ。神について、語って参りましょう。